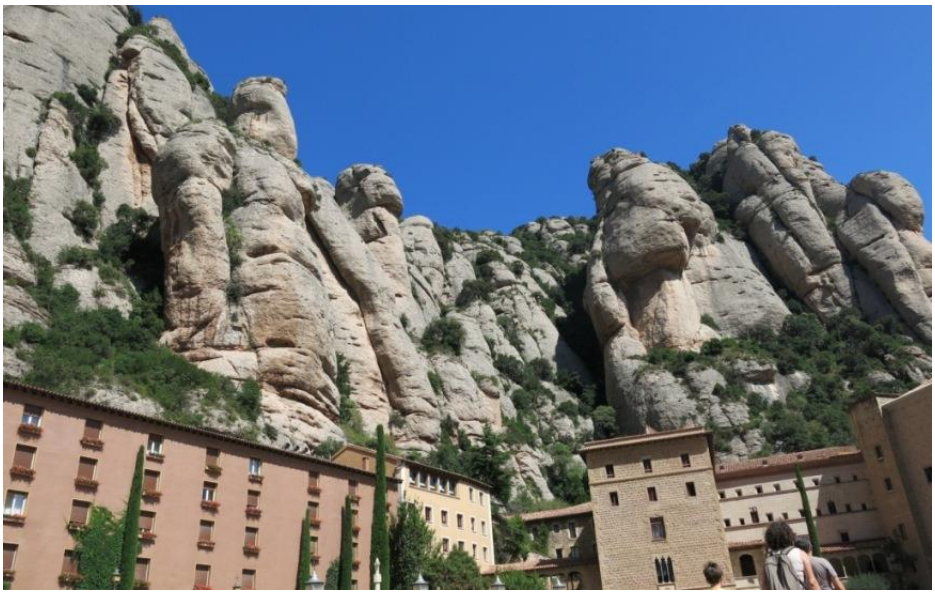
８月２７日（水）トルラから聖地モンセラートに立ち寄り、バルセロナへ向かう。

ホテル出発前の準備、前方のトンネルの方向が南

トルラからバスで山岳地帯を南下する。山岳地帯から丘陵地帯に入ると、ぶどう畑が続く。丘陵地帯を過ぎ、進路を東に向けてバルセロナへ向かう。行けども 行けどもトウモロコシ畑、そして小麦畑だ。スペインはフランス同様、正に農業国であることを実感する。



バルセロナの北西６０ｋｍのところに、奇岩が連なってそびえるモンセラート「のこぎりで挽かれた山」がある。今日このあと訪れるサグラダ・ファミリアのモデルともいわれる標高1235m のこの山には、１１世紀にベネディクト派の修道院が建てられた。洞窟で発見された黒いマリア像（８世紀のイスラム軍の侵攻時に隠された？）の持つ球に触れると願いが叶うといわれ、長蛇の列が続いていたが、我々は時間がそれ程ないため並ばなかった。
大作曲家のワーグナーは、モンセラートの雄大な風景に心打たれ、オペラ「パルジファル」の舞台芸術を思いついたという。

左：修道院で黒いマリア像と並んで
　　人気のある少年聖歌隊
下：信者から奉納されたろうそく

バルセロナを州都とするカタルーニャでは、スペイン語と並んでカタルーニャ語が公用語として使われている。ヘミングウェイの「誰がために鐘は鳴る」で知られるスペイン内戦後のフランコ独裁体制下（1939～1975 年）では、カタルーニャ語は使用禁止となっていた。バルセロナでは、まずサグラダ・ファミリアを見学する。

生誕のファサード

受難のファサード

サグラダ・ファミリア（聖家族）教会は、1884 年からアントニ・ガウディの指揮により建築が続けられてきた。1926 年のガウディ死去後も、日本を含む世界各国の建築家、彫刻家たちが来てガウディの意志を継ぎ建築が進められている。完成予定は 2025～30 年という。

ガウディ

教会内のステンドグラス

右：1492 年コロンブス、アメリカ大陸発見
Columbus discovered America.
America was discovered by Columbus.
下：Cathedral（大聖堂）前のノバ広場

コロンブスの塔

コロンブスはアメリカ大陸発見後、バルセロナに戻ったという。奇しくも、アメリカ大陸発見から５００年後の１９９２年、バルセロナオリンピックが開催された。印象に残っているのは、当時１４歳だった岩崎恭子が２００m平泳ぎで優勝して「今まで生きてきた中で一番幸せです」と語ったことだ。彼女は筆者と同じ静岡県人です。

バルセロナ Hotel Colon 泊

8月28日（木）バルセロナ市内観光のあとドーハ経由で帰国。　⇒　8/29 日本着

日本人ガイドの平野さん（４０年在住）にバルセロナの旧市街地を案内して貰う。ホテルから西へ進むとランプラス通りに出る。カタルーニャ広場と港近くにあるコロンブスの塔を結ぶプラタナスの並木道だ。港の方向へ少し行くと、サン・ジョセップ市場がある。地元の人からはボケリア Boqueria と呼ばれているバルセロナ最大の市場である。

ガウディ初期の傑作グエル邸を見学したあと、レイアール広場に出る。グエル Guell はガウディの生涯のパトロンとなった人である。

レイアール広場の街灯（写真上）はバルセロナの公共事業で、ガウディが学校卒業後初めて手掛けた仕事である。ガス灯の笠と先端の飾りは鉄兜がモチーフとなっている。

バルセロナ市庁舎（サン・ジャウマ広場）

スペイン国旗、カタルーニャ自治州旗、バルセロナ市旗が掲げられている。先日行われたスコットランドの住民投票では独立反対派が勝ったが、１１/９のカタルーニャの住民投票ではいかなる結果となるかが注目される。しかしスペイン政府は住民投票を認めていない。

画家のピカソ、ミロ、ダリは、カタルーニャが育んだ３大巨匠と呼ばれている。 今回はピカソ美術館（写真下）を見学したが、建物は１３～１４世紀に建てられた石造りの宮殿を改装したものだ。展示されているのはピカソの初期と晩年の作品が中心で、ガイドの平野さんは、特に１５～１６歳時の作品である「初聖体拝受」（祈りを捧げる妹）、「科学と慈悲」（医師と病床の女性）を鑑賞してほしいと言われた。ピカソの初期の作品は、１９７９年に筆者がニューヨーク近代美術館で観た「ゲルニカ」とは全く趣を異にするものだった。現在その「ゲルニカ」はマドリードのソフィア王妃芸術センターに収蔵されている。

「パブロ・ピカソとは何者であろう。彼１人で空想的で普遍的な美術館をなしている。ただ単に青とか薔薇色とかいうしかじかの時期の画家というだけではない。否、古代的、原始的、辺境的芸術から、最も驚くべき技法を必要とする芸術にいたるまでの世界の絵画のすべて、芸術のすべての縮約である。彼は可能性の開かれた、ほとんど開かれ過ぎたともいえるこの扇を、少なくとも部分的には彼の生国カタルーニャに負っているのではなかろうか。」
アンリ・ルフェーブル著「太陽と十字架」より

ノバ広場に面した建物のピカソの壁画

ゴシック様式の Cathedral

市内観光を終え、Restaurant Taverna（食べるな）にて昼食。ガイドの平野さんがパエリャをはじめ日本人の口に合ったメニューを選んでくれたため、全員食が進む。最後の晩餐ならぬ、最後の昼餐となった。昼食のあとバルセロナ空港へ向かう。

W杯応援のためブラジルまで出かけた筆者としては、バルセロナへ来てサッカーのことを語らないわけにはいかない。ネイマール（ブラジル）、メッシ（アルゼンチン）といった各国のスター選手を集め、世界最高のレベルを誇るＦ.Ｃ.バルセロナ（通称バルサ）は、カタルーニャ人の魂そのものなのである。バルサのホームスタジアムであるカンプ・ノウ Camp Nou を見学したかったのだが、残念ながらホテルから遠くて断念した。今回日本との往復で利用するカタール航空が、バルサのユニフォームの胸スポンサーとなっているのも何かの因縁だろう。たかがサッカー、されどサッカー！！

バルセロナ空港のバルサ・ショップ

今回の「ピレネー山脈国境横断ハイキング」は、自然、歴史、宗教、芸術とバラエティに富んだ密度の濃い旅となった。筆者にとってはこれまでで最高の旅だと思っている。体力と平衡感覚の衰えをひしひしと感じており、来年はワイン中心の旅に参加したいものだ。

最後に、楽しい旅をご一緒して頂いた参加者のみなさん、企画された天渓代表の赤沼さん、「太陽と十字架」を紹介してくれた５０年来の友人千賀君に感謝の意を表します。

完

[参考文献]

・アンリ・ルフェーブル著、松原雅典訳 「太陽と十字架（原題：ピレネー山脈）」 未来社
・地球の歩き方 「フランス」＆「スペイン」 ダイヤモンド社
・わがまま歩き 「スペイン」 実業之日本社
・関 哲行 編 「世界歴史の旅 スペイン」 山川出版社
・中山 瞭　文・写真 「スペイン 7つの小さな旅」 東京書籍
・るるぶ 「バルセロナ」 JTB パブリッシング
・地図 「Ordesa y Monte Perdido」 Editorial Alpina